

能(求塚)の原形——どこまでが観阿弥の作か——

宮本圭造

三角関係の悲劇を描く能(求塚)は、実に問題の多い作品である。なかでも最大の問題点は、その作者であろう。(求塚)の作者は、長年、観阿弥とされてきた。江戸中期の観世元章の編になる『二百十番謡目録』がすでに(求塚)を観阿弥作としているほか、日本古典文学大系『謡曲集』も、「観阿弥関係の能」として載せている。その根拠は、(求塚)の後ジテ登場の少し後に見える「上ゲ歌」の一節「されば人、一日一夜を経るにだに」が、世阿弥伝書『五音上』に「求塚 亡父曲」として挙がっているからである。この「上ゲ歌」が観阿弥の作曲(作詞も)であれば、「上ゲ歌」を含む能全体が観阿弥の作に相違ない、というのが、長年の通説だったのである。この通説に疑問を呈したのが、表章「(求塚)作者観阿弥説を疑う」『能楽鑑賞の葉』40。『能楽史新考(二)』に転載)である。その中で表氏は、「されば人、一日一夜を経るにだに」で始まる「上ゲ歌」の内容が直前の謡の文句と少しも照応しない点、(求塚)の文句として不可解な箇所が少なくない点を根拠とし、この「上ゲ歌」の一節が「今の(求塚)のため作詞・作曲されたのではなく、別曲の一部だったのを別人が(求塚)に転用した疑いが強い」と結論づけられたのである。もともと(求塚)の一部ではなかったとすれば、「上ゲ歌」の作者が観阿弥であることをもって、(求塚)全体が観阿弥の作であると断定するわけにはいかなくなる。観阿弥以外の誰かが、観阿弥作の「上ゲ歌」を用いて(求塚)を作詞したと考えるのが最も自然であるということになる。その「誰か」は

世阿弥であると考えられる。(求塚)は世阿弥が確立した複式夢幻能の形態を採っており、世阿弥関与の痕跡が確認されるからである。この表説を承けて、現在、(求塚)の作者をめぐるのは、観阿弥原作、世阿弥改作とされることが多いのであるが、その「原作」「改作」の実態については、なお明確にされていない。表氏は「上ゲ歌」の一節のみを観阿弥作曲とし、これを取り入れて世阿弥が能(求塚)を完成させたと解するが、これに対し、(求塚)の作品全体の構想はやはり観阿弥によるのではないかという説も根強く存在する。すなわち、(求塚)を観阿弥原作、世阿弥改作とするのであれば、どこまでが観阿弥の作によるもので、どこからが世阿弥の改作にかかるのか、という、新たな課題が立ちはだかるのである。

まずは、問題となる観阿弥作とされる上ゲ歌の詞章を次に掲げることにはしたい。

されば人、一日一夜を経るにだに、  
八億四千の思ひあり。いはんやわれらは、  
去りにし跡も久方の、天の帝のおん代より、  
今は後の堀河の、御宇に逢はばわれらも、  
ふたたび世にも帰れかし。いつまで草の蔭、  
苔の下には埋もれん、さらば埋もれも果て  
ずして、苦しみは身を焼く、火宅の住みか  
ご覽せよ、火宅の住みかご覽せよ。

この小段は、中入後のシテの登場段で語られる。つまり、塚に眠る菟名日処女の霊が、塚の内に埋もれる我が身の苦しみを訴える一節ということになるが、表氏はこの一節が能(求塚)の

中ではやや異質な小段であるとする。直前のサシや一セイの文言と少しも照合しないこと、「今は後の堀河の御宇」として、それまでの本文中では全く触れられていなかった、時代を限定する文言が見られること、「われら」の語が二回使われていて、シテ一人ではなく、複数の人物の述べたことを思わせること、などがその根拠である。この表説に対して、右の一節を(求塚)の文脈の中で読み解くことは可能である、と反論する研究者もいる。例えば、西村聡は論考「(求塚)8段上ゲ歌者」(『北陸古典研究』8号)の中で、右の「われら」を、菟名日処女だけでなく、後追い自殺を図った二人の男—小竹田男と血沼丈夫—を含めた三人の亡霊の述懐と見て、この一節が前後の文章から必ずしも遊離したものではないとの読みを提示する。また、山中玲子「能(求塚)の虚構」(『文学』隔月八巻一号)は、「(求塚)がもともと中入りのない一場もの能であったと想定し、中入り前後の詞章は後に加わったものと見て、求塚の謂われを語るシテの物語の場面から直接、右の上ゲ歌の詞章に繋がっていた可能性を示唆する。そして、問題の「われら」については、シテの物語の内容を受けて、「恋に身を焦がした二人の男、どちらに靡くこともできずに死んだ女、無意味に殺されつがいを引き離されてしまった鴛鴦のすべての「思ひ」がそこに反映されているという見解を述べているのである。

西村氏・山中氏の主張はともに、右の「われら」という言葉を、菟名日処女だけでなく、その処女のために亡くなった人々をも含めたものとして解することで、前後の文章との整合性を見出し、ひいてはこの上ゲ歌が当初から(求塚)の一節であったことを明らかにしようとする。その最終的な結論には私も同感であるが、「われら」の解釈については、また別の可能性も考えられるのではなからうか。そこで、あらためて上ゲ

歌の詞章を注意深く見てみたいのだが、この詞章では基本的に、「天の帝のおん代」より「堀河の御宇」に至るまでの長い期間、さまざま「思ひ」を抱えながら、苔の下に埋もれなければならぬ「われら」の苦しみが吐露されている。ところが、そうした苦しみを述べた直後に、「さらば埋もれも果てずして」以下、埋もれ果てることもできず火宅の住みかに苦しむ様を「ご覧下さい」と、それまでの言葉からやや視点を異にする文章で締めくくられるのである。右の引用でいうと傍線部の文章がそれであるが、こうしたネジレ現象は、「求塚」の改作にあたっての綻びが表面化している事例なのではなからうか。例えば、この上ゲ歌はもともと「いつまで草の蔭、苔の下には埋もれん」の返しで終わっていたのを、塚の中から後シテ菟名日処女の亡霊が姿を現す場面の詞章にするために、傍線部の文句を付加した可能性が考えられはしまいか。

この上ゲ歌を菟名日処女の述懐とする読みにも疑問の余地がある。これは後シテが謡うサシ。一セイに続く地の謡であり、現行の上演形態による限り、菟名日処女の心情を謡ったものと考えざるを得ないが、「求塚」の他の部分では、草陰に留まり続ける苦しみを、菟名日処女は一切語っていない。この後、火焰と水火に責められ、獄卒に追い立てられた菟名日処女の亡霊は、「ありつる住みかはいづくぞ」と、暗闇の中、もとの「火宅」（そこが今のところ彼女の安住の地であった）に戻ろうとしているのであり、決して菟名日処女は苔の下に埋もれていることを自らの苦しみとして認識していなかったのである。すると、この上ゲ歌はもともと、菟名日処女ではなく、別人の述懐を吐露した文章であった可能性を考えてみなくてはなるまい。能「求塚」の物語に登場するキャラクターの中で、この述懐を吐露する人物として最も相応しいのは、小竹

田男と血沼丈夫の二人である。二人の男は菟名日処女が亡くなった後、後追い自殺を図り、その屍は菟名日処女に寄り添うように、処女の塚の左右に葬られた。この二人の男が菟名日処女への様々な「思ひ」を抱えたまま、永く土の中に埋もれつづけなければならぬ無念を訴えたのが、右の上ゲ歌なのではなからうか。この一節が「われら」という複数の人物の述懐となっていることも符合する。

もちろん、現行の「求塚」に小竹田男・血沼丈夫の二人は登場しない。後シテのセリフ中に、恐ろしやおおことは誰ぞ、小竹田男の亡心とや、さてこなたなるは、血沼丈夫、左右の手を取つて」とあり、二人の男が両手を取つて責め立てる姿が、菟名日処女にのみ見える、という設定である。しかし、古「求塚」から現「求塚」への改作という事情を考慮すれば、その改作にあたって二人の男を省略したということも十分に考えられよう。例えば、右のセリフも、菟名日処女の問いかけに対し、二人の男が答えるという掛け合いの形だった可能性がありはしまいか。現在は複式夢幻能の形を採っている「求塚」も、改作以前は中入りのない形で、若菜摘みの場面と、求塚をめぐるシテの語りの場面の直後に、小竹田男・血沼丈夫の二人の霊鬼が登場して菟名日処女に地獄の責苦を見せる場面が続く、鬼がかりの能であったと見ることが出来まいか。現行の「求塚」で、シテが「のうのおん僧、この苦しみをばなにか助け給ふべき」と脇僧に向かって救済を求めると、ワキが「げにげに苦しみの時来ると」とか「答を振り上げ追つ立つれば」などのセリフを発するのは、いかにも不自然で、これについては山中稿も「異様である」と指摘しているが、これが当初、ワキではなく、ツレ小竹田男・血沼丈夫のセリフであったとすると、この場面にまさにピッタリくるのである。現行「求塚」の

不自然さは、二人の男のツレを登場させなくなくなり、その担当の謡をワキに無理に割り当てたために生じたものである。そもそも、現行「求塚」の脇僧は、シテから苦患の救済を求められているにもかかわらず、十分にその救済の役割を果たしていない。原「求塚」のワキはもともと堀河院の関係者であるとかいった人物であったのを、世阿弥が複式夢幻能の形式に整えるために、ワキを旅の僧に改め、かような不自然さを生じせしめたのではなからうか。脇僧と菟名日処女との救済をめぐる言葉のやり取りも、後に付け加えたような唐突感があり、その僧と処女とのセリフをカットしてみると、菟名日処女への折檻ということで後場の主題はより鮮明になるように私には思われるのである。

そこであらためて、先に問題にした「上ゲ歌」に立ち返ってみる。この部分はシテ菟名日処女の謡ではなく、もともとはツレの小竹田男と血沼丈夫による謡であったと考えるのが、自然である。さらに、その前段の「サシ」「曠野人稀なり、わが古墳ならでまた何ものぞく」、「一セイ」」「古墳多くは少年の人々」も、堅い響きの漢語が目立ち、後シテ菟名日処女の登場詞にはあまり似つかわしくない。「古墳多くは少年の人」とあるのも、若くして菟名日処女の塚の傍らに葬られることになった、二人の男の登場詞と見た方がしっくりくる。すなわち、現行の「求塚」の後シテ登場段の詞章は、当初、ツレの小竹田男と血沼丈夫の登場詞であったのを、後に世阿弥がツレの出ない形に改め、その際、部分的に詞章に手を加えたのが、現行の「求塚」ということになる。表氏をはじめ多くの研究者が指摘する「上ゲ歌」の異質性も、以上のような改作に起因すると見るのが妥当であると考えるのである。

(法政大学能楽研究所教授)